



国内アルミスクラップ産業壊滅、そして未来へ

昨年来の世界的な不況を受けて、国内のアルミスクラップ産業は、壊滅的な打撃を受けています。国内需要は、幾つかありますが、大きなものとしては、自動車向け、建築向けがあります。

通常、市中から発生するアルミスクラップは、その大半が自動車向けのアルミインゴットを作っているアルミ二次合金メーカーに販売されていきます。しかし、このメーカーが自動車の大減産を受け、アルミ合金の casting 量を 30% 程度まで減らしています。これが短期間で終わるのであれば、それ程大きな問題にならないのですが、今回は、昨年秋から減産が強化され、今年 1~3 月は、ほとんど購入ゼロといった状況です。二次合金メーカーも決算の関係もあり、在庫圧縮を至上命題としていました。しかし、一方で、市中からも少ないながらもスクラップは、発生し問屋に持ち込まれてきます。当然、問屋には在庫の山が出来ます。それでも、メーカーは、対応しませんでした。結果として、かつてのメーカーと問屋の信頼関係は、崩壊してしまっただけです。非鉄専門問屋では、怨嗟の声すら聞こえており、よほどプレミアムが付かなければ、メーカーには販売しないといった声もあちこちで聞かれる様になっています。本来は、それでも買ってもらう相手なので、あまりな事は言えないはずですが、非鉄専門問屋がメーカーに反旗を翻せた理由には、中国の存在があります。世界的な不況の波は、もちろん中国にも及んでおりますが、それでも GDP の伸びは高く、また中国政府が 50 万トン戦略備蓄すると発表した事にあります。世界的には、アルミの在庫は、過去最高水準にあります。上海市場での在庫は、減少傾向にあります。この中国需要の早い段階での回復を受け、アルミスクラップは、ジリ高傾向にあります。もちろん、LME についてもファンダメンタルズの好転を受けて上昇傾向にあります。これらの要因によって、アルミスクラップは、海外という新たな販路を開拓したのです。かつて、鉄スクラップが、国内メーカ

一の減産を受けて、輸出マーケットを開拓した様に、アルミについても輸出が始まったのです。鉄スクラップの場合には、この輸出が関東鉄源協議会といった、関東地区の大半の問屋が加盟する大きな組織に発展しました。ここの行う入札は、日経新聞の 1 面に掲載される程、影響力をもっております。アルミについても同じように組織化されるのか？という体質的に難しいと思います。それでも個々の問屋単位での輸出対応は、続いていくものと思われま

す。国内で発生したスクラップを集荷・選別し、本来であれば、日本は資源の少ない国ですから、国内に販売していきたい。しかしその需要が大幅に減ってしまいました。長期的に見ても、人口の減少によってどこまで回復するのか疑問です。2050 年には、人口の 50% が 65 歳以上という予測が発表されていますが、その状況で、自動車、住宅といった需要が大きく伸びるとは思えないからです。もちろん一定の需要はありますが。

ナショナリズムとしての国境というものは、相変わらず高いと思いますが、一方でビジネスの視点で見た国境というものは非常に希薄になっていると思います。国内の需要が長期低迷する中で、ビジネス国境が希薄になった今、東アジア共同体が提唱されて久しいのですが、中国、インドを加えたアジア全体を一つのビジネス圏として大きなマーケットとして捕らえる事は、至極当然だと思えます。その際のアルミマーケットでは、個々のアルミ部品の casting は、より大きなマーケットを求め、現地化が進んで行くでしょう。同時にサプライヤーである二次合金メーカーは、同様に海外での比重を高めていくという事になっていくのではないのでしょうか。ここまでで考えると輸出は、バラ色の未来の様にも見えますが、同時に為替リスクを考慮しなくてはなりません。最近でこそ、1 ドル 100 円まで下がっていますが、同時に 1 ドル 70 円といった状況も考慮しておくべきでしょう。その際には、原料の一部輸入、製品の一部輸出といった形で、対応して行く事も視野の中に入れておかなければなりません。いずれにしろ、昨年来の状況を鑑み、両足を国内に置くのではなく、片足をやや重心を軽くしながらも国外に置くことは必要な事だと思います。世界経済全体で見れば、確かにアジア全体での GDP は、まだまだ小さいかもしれませんが、それでもアジアの中で見たビジネス国境は、益々ボーダレス化して行くでしょうし、大きなマーケットとして益々成長して行く事でしょう。世界人口の 30% 以上が集中し、みんながリッチになろうとしているのです。人口増加とハングリーな精神がアジアの推進力となり、共生にこそ日本の未来もあるのかも知れません。

桜を通して見た空はどこまでも青く、広々としていて、世界の広さを、そして可能性を感じさせるものでした。臆せずチャレンジしていきたいものです。